

「家族はじめました」

蓼内健太

登場人物

関国太郎 (45)

レンタル家族屋

三浦聡子 (14)

中学2年生

三浦千恵 (44)

聡子の亡き母

おじ (55)

聡子のおじ

おば (52)

聡子のおば

佐伯哲夫 (28)

国太郎の同僚

○ 東京・下町の情景

じりじりと照りつける真夏の太陽。
アスファルトに陽炎が立っている。
昼の買い物客で賑わう商店街。
蝉しぐれに、自転車のベルが交じる。

○ 葬儀場・火葬場

納め式が執り行われている。
かまどの前に安置された棺。
40代半ばの女性（三浦千恵）の遺影が飾られてある。
それほど多くない参列者が、棺の小窓を開け、最後のお別れをしている。
やがて棺がかまどのなかに納められる。
合掌する一同。
その中で必死に涙をこらえている、制服姿の少女聡子（14）。

聡子「……」

故人の一人娘である。

○ 割烹店・表

路地裏のひっそりとした店構え。

おじの声「本日は長時間にわたりお力添えを
頂きました、ありがとうございました」

○ 同・一室

精進落としが執り行われている。

挨拶をしているのは、親戚のおじ。

その横におば、聡子が座っている。

おじ「おかげさまで滞りなく葬儀を終えるこ
とができました、遺族を代表いたしまし
て、心より御礼申し上げます。ささやか
ではございますが、精進落としのお膳を
ご用意させていただきました。ごゆっく
りおかつろぎください。本日はまことに
ありがとうございました」
主婦連中が、ひそひそと噂話に花を咲か
せている。

主婦 A「あの人たちでしょ。聡子ちゃんを引
き取るっていう親戚は」

主婦 B 「ずっと児童施設に預けておくわけに
いかないもんねえ」

主婦 C 「北海道で牧場やってるんだって」

主婦 A 「へえ立派なもんね」

主婦 B 「千恵ちゃんも、草葉の陰で喜んでる
わよ」

一方の聡子は、古い写真を取り出して、
こっそり眺めている。

写っているのは、15年前の母・千恵と、
一人の男性。スナック店のカウンターで
写された一枚である。

聡子「……」

○ 病院・一室（回想）

入院患者が6人いる大部屋。

奥のベッドに千恵がおり、見舞いに来た
聡子に、さっきの写真を手渡したところ
である。

聡子「……この人が？」

千恵「そう、あんたの父親」

聡子「わたし、死んだとばかり……」

千恵「ごめんね。許してね」

聡子「……」

千恵「あんたが生まれたこと知らないんだ、その人」

聡子「……」

初めて見る父、関国太郎である。

○ ホテル・披露宴会場 A

写真から15年後、現在の国太郎（45）、出席者にお酌をして回っている。

国太郎「どうぞお一つ」

国太郎、時間を気にする。

誰にも気づかれぬよう、そっと会場を抜け出す。

○ 同・廊下

国太郎、ビール瓶を持ったまま、廊下を猛ダッシュ。
階段を駆け上がる。

○ 同・披露宴会場 B

別の披露宴が行われている。

国太郎が息を切らして入ってくる。

それを見つけた佐伯哲夫（28）、近づいてきて、

佐伯「どうですか、向こうは？」

国太郎「お色直しの最中」

と喉が渴いて、持っていたビールを手酌で飲む。

佐伯「すみません。急にバイトの高杉さんが来られないっていうもんだから」

国太郎「まったく、どうせ年甲斐もなく、アイドル追っかけてんだろ」

佐伯「でも同じホテルで助かりましたよ」

国太郎「どうせなら同じフロアーがよかったけどな。で、おれは誰だっけ？」

佐伯「新郎の叔父です」

国太郎「ああ、そうだ新郎の叔父ね。もう、あっちもこっちもだから、混乱しちゃっ

てよ」

国太郎、愛想よく出席者に近づいていき、
お酌を始める。

○ メインタイトル『家族はじめました』

○ 児童養護施設・表

荷物を抱えた聡子が、親戚のおばに付き
添われて出てくる。

見送りに出た施設の先生に、

おば「どうもお世話になりました」

先生「これから北海道へ？」

おば「いえ、普段あまりこちらに出て来られ
ませんので、ついでに東京を3、4日見
て回ろうかと」

先生「そうですか」

おば「ほら、聡子」

と挨拶するように促がす。

聡子「お世話になりました」

先生「元気でね。また遊びにおいで」

聡子「はい」

おば「では」

と二人去っていく。

○ 郊外の小さな駅

自動券売機の前に、聡子とおばがいる。

おばが料金表を確認している。

聡子「おばさん」

おば「なんだい」

聡子「ちよつと寄りたいところあるんだけど」

おば「どこ？」

聡子「友達のところ」

おば「今からかい」

聡子「お別れ言いたいし」

おば「そうかい、一人で大丈夫かい」

聡子「うん」

おば「じゃあ、先にホテル帰ってるから、気

をつけて行くんだよ」

聡子「うん」

○ 新宿区大久保あたり

韓国料理店、語学学校、ハンダルの看板。
雑然とした街並み。

聡子が不慣れな感じで歩いている。

○ 雑居ビル・表

聡子、住所の書かれたメモを頼りに来て、
足を止める。

聡子「ここだ……」

雑居ビルは、路地裏に面した4階建て。

1階に韓国料理店、2階に日本語教室、

3階に人材派遣・関コーポレーションの
看板。

聡子、意を決して、中に入ろうとする。

聡子「！？」

ちようど様々な国の留学生が大勢出てき
て、尻込みする。

○ 同・3階・国太郎の事務所

汚れた室内。

ワンルームがパーティションで仕切られ、
事務所と居住スペースに分けられている。

国太郎、喪服に着替えている。

佐伯、時間に追われ、慌てている。

佐伯「ああ、忙し忙し」

国太郎「打ち合わせか？」

佐伯「ええ、じゃあ行って来ます」

国太郎「あ、おい、あれどうなった？」

佐伯「え？」

国太郎「バイトの募集」

佐伯「だめですね。今のところゼロです」

国太郎「そうか。相変わらずの人材不足か」

とため息をつく。

○ 同・表

中から飛び出してきた佐伯と、ドアの外
にいた聡子が、ぶつかりそうになる。

聡子「すみません」

佐伯「こちらこそ」

と行きかけるが、聡子が気になり、

佐伯「あの、なにか？」

聡子「あ、いえ、あの」

佐伯「あ、もしかして、バイト？」

聡子「え？」

佐伯「（室内に向けて）社長！ ついに来ま

したよ、バイト希望者！」

聡子「え、いや、あの」

佐伯「それじゃあ」

と、行ってしまふ。

国太郎、中から顔を出して、

国太郎「いらっしやい！ あれ、ずいぶん若いな。まあいいや、さアどうぞ」

聡子「いえ、あの」

国太郎「あ、時間がないんだった」

と時刻を確認して、

国太郎「……君、時間ある？」

聡子「はあ」

国太郎「よし、じゃあ一緒に行こう」

聡子「行くって、どこへですか？」

国太郎「葬式」

聡子「え？」

○ 郊外の寺

ゴーンと鐘が鳴る。

緑に囲まれた寺。

中からお経が聞こえる。

○ 本堂

通夜が行われている。

国太郎「先生！」

棺に飛びつかんばかりの国太郎。

その泣きっぷりに、他の参列者たちも思わずもらい泣きをする。

部屋の隅の聡子、神妙な様子で見ている。

○ 同・玄関

葬式も終わり、参列者らも居なくなつた境内。

帰り支度をする国太郎に、聡子がおおずおと言葉をかける。

聡子「あの、なんて言ったらいいか……ご愁傷さまです」

国太郎「え？」

聡子「いや、ですから」

遺族の男性がやってくる。

国太郎「どうもご苦労様です」

男性「では、これ」

と、封筒を差し出す。

国太郎、封筒の中身を確認する。

中身は現金である。

国太郎「はい、たしかに。こちらが明細書です。また何かありましたら、よろしくお願ひします」

男性「ご苦労様でした」

と去ってゆく。

聡子「？」

国太郎、財布から千円札を3枚取り出し、聡子に差し出す。

国太郎「これ、今日の分。研修期間だから、こんなもんだけど、すぐにバイト代、上

げるから」

聡子「え？」

国太郎「なに、不満か？　しょうがねえな、

じゃあ特別だぞ」

と、もう千円足す。

聡子「あの、さっきのアレ、仕事ですか？」

国太郎「そうだよ、人材派遣なもの」

聡子「人材派遣？」

国太郎「（キヤッチコピーを読み上げるよう

に）結婚式、見合い、葬式。親類家族が

必要なのに訳あって呼べない。世間体が

気になる。出席者が少なくて困っている。

電話一本で駆けつけます。あなたの家族、

関コーポレーション。ほら、おれ関国太

郎だから、関コーポレーション」

聡子「はあ」

国太郎「レンタル家族って聞いたことない？

要は、まあ人助けよ」

聡子「人助けですか」

国太郎「なに、そんなことも知らずにバイト

に来たの？」

聡子「あ、いえ、違うんです」

国太郎「歳いくつ？」

聡子「14です」

国太郎「14って、中学生じゃねえか。それ

じゃあ無理だ。雇えないよ」

聡子「ですから、そうじゃないんです」

聡子、例の写真を取り出して、見せる。

国太郎「なにこれ？ あ、オレだ」

聡子「その写真に、見覚えは？」

国太郎「え、ちよっと待てよ……うーん」

聡子「これが母です」

と写真の千恵を指差す。

国太郎「へえ、なかなかのべっぴんだ」

聡子「それでこっちが」

と、写真の国太郎を指差す。

国太郎「それはオレだね」

聡子「——お父さん」

国太郎「そうそう、お父さ……え？ お父さ

ん？」

聡子の真剣な眼差し。

○ 公園

国太郎と聡子、ブランコに乗っている。

国太郎は勢いよくブランコを揺らしながら、大笑いしている。

聡子「違うんですか？」

国太郎「申し訳ないけど」

聡子「でも」

国太郎「いや、確かに君のおふくろさんが働いてたスナックは知ってるよ。何度か飲みに行ったこともあるし、おふくろさんのこともなんとなく憶えてる。でも俺はあんたの親父じゃない」

聡子「どうして、そう言いきれるんですか？」

国太郎「そりゃ分かるよ。だって子供は一人じゃできないもの」

聡子「でもお母さんが——」

国太郎「勘違いだよ、お母さんの勘違い」

聡子「……」

国太郎、腕時計を見やり、

国太郎「お、いけねえ。もうこんな時間だ」

と、ブランコから飛び降りる。

国太郎「とつとと帰って、あの人は父親じゃ

ありませんでしたって、そうおふくろさ

んに教えてあげな

国太郎、行きかける。

聡子「……死にました」

国太郎「え？」

聡子「母は、3日前に」

国太郎「そうか……そうだったのか」

しんみりとなる。

聡子「……あの、お願いがあるんです」

国太郎「なんだ、言ってみな」

聡子「今度の日曜まで泊めてもらえません

か」

国太郎「泊めるって、どこ？　うちに？」

聡子「日曜に北海道へ発つんです。向こうの

親戚の家で、面倒みてもらう事になって。

だからそれまで——」

国太郎「ダメ、ダメ」

と、慌てる。

聡子「どうしてですか」

国太郎「そんなの無理に決まってるだろう。」

俺は赤の他人だぞ。そんな赤の他人の家に、年端も行かない女の子を泊められるわけ、ないだろう」

聡子「お願いします」

国太郎「悪いけど忙しいから失礼するよ」

聡子「お手伝いします。炊事、掃除、洗濯、

なんでも——」

国太郎「そういうこっちゃないんだよ」

聡子「……」

国太郎「じゃあな」

国太郎、行ってしまおう。

聡子「……」

○ 道

国太郎がスタスタ行く。

ふと気になって後ろを振り返ると、聡子がついてきている。

国太郎「……」

辺りを見回して、ちょうど通りかかったタクシーを止める。

タクシーに飛び乗り、

国太郎「出して。早く」

運転手「へい」

走り出すタクシー。

聡子「あ」

聡子、必死で追いかけるが、どんどん引き離されて、ついに見えなくなる。

聡子「……」

○ ラーメン屋（夜）

国太郎「ごちそうさん」

と出てくる。

○ 雑居ビル・表（夜）

国太郎が鼻歌交じりで帰ってくる。

○ 同・3階・国太郎の事務所前（夜）

軽快に階段を上ってきた国太郎、ギョツとなる。

ドアの前に、聡子がいる。

聡子「……」

国太郎、ため息をつく。

腕時計を見やり、

国太郎「しょうがねえな。一晚だけだぞ」

聡子の顔が華やぐ。

国太郎「ただし、間違ってもお父さんなんて

呼ぶなよ。いいな？」

聡子「はい」

国太郎、うんざり顔で、さらに大きなため息をつく。

○ 故郷の山々（回想）

岩手県、県北地方。

日光を浴びて、きらめく水田。

その向こうにそびえたつ山々。

国太郎の故郷である。

○ 国太郎の実家・表（回想）

大きな間口の農家の家。

鯨幕がかかっている。

○ 同・座敷（回想）

国太郎の母の葬式が執り行われている。

25歳の国太郎、駆けつけてくる。

国太郎「おふくろ！」

母の亡骸にむしやぶりつく国太郎。

国太郎の父、そんな息子に冷たい視線を送る。

父「何しにきた」

国太郎「何って」

父「二度とうちの敷居またぐなっつたべ」

見かねた親戚が、

親戚「ちよつと、何も葬式の席でそんな」

国太郎「あんたに会いに来たんじゃない。お

ふくろさ会いに来たんだ」

父「何がおふくろだ。散々迷惑かけといて。

おめえさえいねがったら、母ちゃんだつて死なずにすんだべ」

国太郎「どういう意味だ」

父「そうでねえが。おめえの借金ば返すために、朝から晩まで働いて。身体壊すの当然でねえが。おめえが母ちゃん殺したも同じだ」

国太郎「その言葉、そっくり返すよ」

父「なにい」

国太郎「おふくろほど不憫な女、オレは知らねえよ。女中みてえにこき使いやがつて。おふくろの寿命ば縮めたの、あんたでねえが！」

国太郎「なにをッ。この野郎」

父が国太郎に飛びかかり、もみあう二人。周りが二人を引き離す。

父「出てけッ。二度と面見せんな」

国太郎「ああ、出て行くよ。こんな家、二度と戻ってくるか」

国太郎、近くにあったグラスを壁に投げつける。

○ グラスの割れる音で国太郎が目覚ます
ここは国太郎の事務所。

仕切りの向こうを覗くと、聡子が割れたグラスを拾っている。

国太郎「何してんだ」

聡子「すみません、ちよつと掃除を」

国太郎「いいよ、そんなことしなくて」

聡子「あの、朝食は？」

国太郎「いらない」

聡子「そうですか……」

ベッドから起きた国太郎、さっそく出かける準備を始める。

聡子「お出かけですか？」

国太郎「仕事だ」

聡子、迷ってから、尋ねる。

聡子「……あの、どうしてお父さんは――」

国太郎、じろりと睨む。

聡子「あ、いえ、……どうして国太郎さんは、この仕事を？」

国太郎「どうしてって、そりゃあ——」

と、答えに詰まって、

国太郎「つまらないこと聞くんじゃないよ」

○ 雑居ビル・表

国太郎と聡子が出てくる。

1階の韓国料理屋に勤める女性店員が、店先で掃除している。

女店員「(韓国訛りで)クニさん。その子、誰？」

国太郎「誰でもねえよ」

女店員「娘さん？」

国太郎「馬鹿も休み休み言え」

女店員「そうだね、美人だから、クニさんの娘じゃないね」

国太郎「どういう意味だよ、それ」

女店員、笑っている。

国太郎「もうおまえんとこのジャージャー麺、

頼んでやらねえぞ」

と、歩き出す。

聡子、女店員に一礼してから後を追う。

○ 駅前

国太郎「じゃあな。達者で暮らすんだぞ」

聡子、不満げである。

国太郎「なんだよ。一晩って約束だろ」

聡子「……」

国太郎「じゃあな」

と行きかける。

そのとき駅から出てきた老人が国太郎を
見かけて、

老人「もし」

国太郎「はい？」

老人「田中さんじゃありませんか？」

国太郎「田中？ いいえ」

老人「やっぱりそうだ。いやあ奇遇ですな。

その節はどうも」

国太郎「あの、人違いじゃ——」

老人「結婚式以来ですかな」

国太郎「結婚式？ あっ」

と、ハツとなる。

国太郎、仕事で行った結婚式で会った誰かだと分かるが、どの結婚式だったかは思い出せない。

老人「ヒロシ君のご親戚でしたな？」

国太郎「ええ、まあ」

と、話を合わせる。

老人「どうもご無沙汰しております」

国太郎「こちらこそ、どうも」

老人「凜太郎には会われました？」

国太郎「凜太郎？」

老人「ご存知ありませんか。子供が産まれたんです。初孫です」

国太郎「ああ、それはどうもおめでとうございます
います」

老人「そうだ。ご一緒にどうです？ これからすぐそこの中華料理屋でヒロシ君らと食事するんです」

国太郎「いえいえ、そんな」

老人「宜しいじゃないですか。凜太郎もつれてくるそうですから、顔でも見てやってください」

国太郎「いえ、このあと、ちよつと野暮用があるもんですから」

老人「また、そんなこと仰らずに」

強引な誘いに、困る国太郎。

すかさず、聡子が機転を利かして、

聡子「あいたたた」

と腹を押さえてうづくまる。

国太郎「ど、どうした？」

聡子「お腹が」

国太郎「さしこみか？」

聡子「びよ、病院」

と目配せする。

それを察して、

国太郎「よし、わかった」

老人「大丈夫ですか。救急車を……」

国太郎「いえ、結構。病院はすぐそこですか

ら。では、いずれまた改めて」

老人「はあ、お大事に」

国太郎「みなさんによろしく」

と聡子連れてすばやく退散する。

○道

息を切らして逃げてくる国太郎と聡子。

国太郎「危なかった」

一息つくくと、二人とも笑いが込み上げてくる。

国太郎「……日曜までだな？」

聡子「え？」

国太郎「行くところ無いんだろ？」

聡子「はい」

国太郎「わかった。置いてやろう」

聡子「(嬉しい)」

国太郎「ただし、くれぐれも——」

聡子「お父さんとは呼びません」

国太郎「……よし」

○ 結婚式場

結婚式が終わったところ。

両家の親戚が集まって、写真撮影が行われている。

そのなかに、国太郎と聡子がいる。

二人の隣にいた初老の女性が声をかけてくる。

初老の女性「可愛らしい、お嬢さんですね」

国太郎「あ、いや、親子じゃないんです。こ

れは姪っ子です」

初老の女性「ああ、そうでしたか。どことな

く口元が似てらっしゃったので」

国太郎「そうですか。まあ、よくある平凡な

口ですから」

聡子、笑いをこらえている。

国太郎「(ぶつぶつ) 相当目が悪いな、あの

ばあさん」

カメラマン、国太郎に声をかける。

カメラマン「そちらのお父さん……お父さん」

国太郎「わたし？」

カメラマン「もう一步、お嬢さまに近づいて
いただけますか」

国太郎「お嬢さま？」

カメラマン「ええ」

国太郎「いや、これは娘じゃなくてですね、

その…もういいや」

思わず吹き出してしまう聡子。

○ 洒落た街角

国太郎と聡子が、誰かを待っている。

聡子「次はどんな依頼ですか？」

国太郎「結婚記念日に、死んだ夫の代わりを

してほしいんだと」

聡子「へえ、今でも愛してるんですね」

国太郎「冗談じゃないよ」

と、乗り気で無い。

聡子「なにか困ったことでもあるんです

か？」

国太郎「大ありだよ。たまにあんだよ、こう

いう仕事」

聡子「？」

国太郎「欲求不満の、こんな太った婆さんが、人材派遣をホストクラブかなにかと勘違いしてんだよ」

聡子「……それで、私は何をすれば？」

国太郎「それなんだけどな、バレないようについてきてほしいんだ」

聡子「尾行するんですか？」

国太郎「予定では食事して、買い物して、それで終わりのはずだけどな、それ以上求められたら、たまったもんじゃなからな」

聡子「それ以上？」

国太郎「うん、つまり、その、なんだ……まあ細かいことはいいんだ。とにかく『やばいな』って思ったら合図出すから、もしたら俺の携帯に電話しろ。それを口実に逃げるから」

聡子「合図？」

国太郎「そうだな……これにしよう。俺がこ
うしたら電話だ」

と、後頭部を搔く仕草をする。

女性の声「あー」

40代の上品な美人が立っている。

国太郎「ハイ？」

美人「人材派遣会社の方でしょうか？」

国太郎「ええ、左様でございますが」

美人「わたくし、あの、夫の代役をお願いし
た――」

国太郎「え！ あっ、いや、これはどうも」

美人「どうぞよろしくお願いいたします」

国太郎「いや、あの、こちらこそ、よ、よろ
しく、お願いいたします」

国太郎、緊張して後頭部を搔く。

聡子、それを見て、

聡子「（小声で）もう？」

国太郎「先に帰ってる」

聡子「でも」

国太郎「いいから。ほらこれでアイスクリー

ムでも買って」

と、1万円渡す。

国太郎「じゃあ、いきましようか」

と、鼻歌交じりで依頼人と歩き去る。

聡子、呆れている。

○ 国太郎の事務所

聡子、帰ってくる。

聡子「ただいま帰りました」

佐伯、待ちかねて、

佐伯「あ、聡子ちゃん！」

聡子「どうかしたんですか」

仕切りの向こうから、親戚のおじ夫婦が
出てくる。

聡子「（驚いて）おじさん、おばさん」

○ 同・時間経過

おば「ダメじゃない、急に居なくなったりし
て。心配したのよ」

聡子「……ごめんなさい」

おば「さあホテルに帰りましょう」

聡子「……」

おば「どうしたの？」

聡子「……日曜日までここにいちやダメ？」

おば「？」

聡子「北海道に行ったら、もう会えなくなる

でしょ、だから」

おじとおば、顔を見合わせる。

おじ「やっぱり、お父さんだったのかい？」

聡子、うなづく。

おじ「その人、自分が聡子ちゃんの父親だと

認めたのかい？」

聡子、迷ってから、小さく頷く。

おじ「そうか……」

おば「どうします？」

おじ「……どうしますって、仕方ないだろ」

おば「でも」

おじ「ただし、日曜には私たちと一緒に北海

道へ行ってくれるね？」

聡子、うなづく。

おじ「約束してくれるね？」

聡子「はい」

○ 古いアパート・表（夜）

細い裏路地。

塀の上で眠る野良猫。

○ 同・一室（夜）

2Kの間取りに、婆さんが一人で暮らしている。

国太郎と聡子、そして婆さんの3人が、夕飯を終えたところ。

聡子「美味しかった。ごちそうさま」

婆さん「よっこいしょ」

と、立ち上がる。

国太郎「ああ、いいよいいよ。おふくろは、

ゆっくりしとけよ」

婆さん「そうかい。すまないね」

聡子が代わりに、汚れた食器の後片付けを始める。

婆さん、肩をとんとん叩く。

国太郎「肩でも揉もうか」

婆さん「あら、どうも」

国太郎「『あら、どうも』はないだろ。親子

なんだから、水臭いこと言うなよ」

婆さん「ああ、そうだったね」

婆さんの白髪まじりの頭。細い首筋。瘦せた肩。

国太郎、肩をもみながら、それらを悲しげに見つめる。

国太郎「こんなに痩せ細っちゃまって。いい加減、ビルの清掃なんてやめたらどうだ？
立ち仕事は身体に毒だぞ」

婆さん「じゃあどうやって、おまんま食べるんだい」

国太郎「この前話した煙草屋にしなよ。座つてできるし」

婆さん「そうだねえ」

国太郎「頼むから長生きしてくれよな」
婆さん「ありがとう」

しみりとなる。

柱時計がポーンと鳴る。

それを合図に、婆さんがおもむろに立ち上がり、箆笥からがま口を取り出す。

婆さん「いくら？」

国太郎「え？」

婆さん「レンタル代」

国太郎、気持ちをそがれて、

国太郎「……いいよ」

婆さん「いいってことはないだろ」

国太郎「いいって。今日はサービス」

婆さん「へえ、もうけた。珍しいこともあるもんだ」

国太郎「……」

○ 裏道（夜）

婆さんのアパートからの帰り道。

聡子「あのお婆さん、家族いないんですか？」

国太郎「息子夫婦が近くに住んでるけどな、

嫁とはそりが合わないし、孫も一向にな
つかないって」

聡子「……」

国太郎「真顔で、『あんたのほうがよくぽど
息子みたいだ』って言われたときは、泣
けたよ」

聡子「……なんだか、かわいそう」
しんみりする。

聡子「国太郎さん、家族は？」

国太郎「オレか？」

聡子「いないの？」

国太郎「いないも同然だな。母親はずいぶん
前に死んじまったし、親父は生きてるけ
ど、もうずいぶん会ってないな」

聡子「どうして？ 喧嘩でもしたの？」

国太郎「さあな。忘れちゃったよ」

聡子「仲直りすればいいのに。家族なんだか
ら」

国太郎「家族だから、そう簡単にはな」

一軒の家から、暖かな明かりと家族団ら

んの声が漏れている。

二人、思わず足を止める。

聡子「……私なら今すぐ謝って、仲直りするけどなあ」

国太郎「……」

聡子「わたしのお母さん、夜の仕事だったでしよ。だから家帰っても、いつも誰もいなかったの」

国太郎「そうか」

聡子「いっぺんでいいから、灯りのついた家に、ただいまって帰って見たかったな」

国太郎「……」

○ 都会の街並み

土曜日の混雑。

楽しげに行き交う人々。

○ チャペル

ウエディングドレス姿の新婦・里中楓が、父親とバージンロードを歩いている。

その様子を見つめる参列者。

国太郎、聡子、佐伯の姿もある。

以下、小声で。

聡子「あの父親もレンタルですか？」

国太郎「アルバイト」

聡子「へえ」

国太郎「今回は新婦側の両親から親類に至る

まで総勢20人の大仕事だからな。気を

引き締めていけよ」

聡子「はい」

二人の会話を横で聞いていた佐伯。

佐伯「でも依頼に来たのは新郎ですよ」

国太郎「ああ、新郎の父親が県会議員らしく

てな。新婦側に親戚が一人も居ないんじ

ゃ、体裁悪いからって」

佐伯「へえ」

国太郎「天涯孤独って話だ」

聡子「……」

聡子、牧師の言葉を神妙に聞く、新婦の

楓を見やる。

○ 披露宴会場

披露宴が賑やかに執り行われている。

ひな壇の新郎が、出席者との写真撮影に精を出している。

新婦はお色直しの最中で中座している。

国太郎が「どうもおめでとうございませす」などと、お酌をして回っている。

席に戻ってきて、

国太郎「ああ、疲れた」

と一息つく。

聡子がいらないのに気づき、

国太郎「あれ、あいつは？」

佐伯「ああ、さっきトイレ行くなって出ていき
ましたけど」

国太郎「ふうん」

○ 同・ホール

国太郎が会場から出てくる。

国太郎「（辺りを見回す）」

聡子が隅でこそこそしている。

国太郎「どうした、そんなところで」

聡子「シート」

国太郎「なんだよ……ん？」

すでにお色直しを終えた楓が、人目をはばかるように、初老の夫婦ともめている。彼らは楓の実の両親である。

*

楓「なんで来たのよ」

母「なについて、朝一の急行に乗って」

楓「そうじゃなくて、何しに来たのよ」

母「そりゃ、おめえが結婚するって聞いて、

そんで慌てで」

楓「なにも来ることないでしょ」

母「親だもの、娘の結婚祝福するの当たり前でねえが」

楓「親子の縁を切るって言ったのはそっちなよ。それを今さら……迷惑よ」

母「迷惑だなんて、またそったらこと言って。父さんからも、なんか言ってる」

父はじつと黙ったままである。

楓「もう帰って」

母「楓」

楓「私の幸せの邪魔、しないで」

母「邪魔って、母さんたちはただ——」

父「へムツとしたまま）もういい」

母「父さん」

父「もういい。何も言うな」

介添人がきて、

介添人「楓さん、そろそろ」

楓「はい」

楓、その場を立ち去る。

*

聡子「ちよつと待って」

と、楓を呼び止めようとする。

それを国太郎が止める。

国太郎「やめとけ」

聡子「でも」

国太郎「他人が口出すことじゃない」

聡子「だって、あれじゃあまりにも……」

国太郎「しょうがないさ」

聡子「だって家族なのに」

国太郎「家族、家族って言うけど、所詮、家族だって血の繋がった他人だ」

聡子「そんな——」

国太郎「血が繋がってる分だけ、他人以上に面倒なもんなんだ」

聡子、国太郎を睨む。

国太郎「な、なんだよ」

聡子「お父さんは本気でそんなこと——」

国太郎「おい、オレは親父じゃないって、言
つたろ」

聡子「……」

国太郎「いいか、もう一度だけ言っとくぞ。
オレとお前は赤の他人だ」

聡子「馬鹿！」

聡子、泣きながら駆けてゆく。

国太郎「お、おい！」

○ 街

日が暮れかけた街角。
行き場も無くさまよう、聡子。
途方にくれている。

○ 披露宴会場

披露宴も大詰めである。

国太郎、聡子の空席を見て、

国太郎「なんだよ、まったく」

と愚痴をこぼす。

佐伯「聡子ちゃん、大丈夫ですかね」

国太郎「そんなこと、知るか」

佐伯「……」

司会者「それではここで新郎新婦からご両親

への花束贈呈です」

花束を持った新郎新婦が、両親のもとへ、

ゆっくり近づいて来る。

国太郎、大きくため息をつく。

佐伯「どうしたんです？」

国太郎、会場を飛び出していく。

佐伯「？」

○ 同・ホール

出てきた国太郎、辺りを見回す。

ベンチで途方にくれていた楓の両親を見つける。

国太郎「早く。急いで」

父「はい？」

国太郎「さア」

と2人の手を強引に引く。

母「あの、ちよつと」

○ 披露宴会場

今まさに、両親へ花束が贈呈されようとしていた、そのとき――。

国太郎、楓の両親を連れて入ってくる。

佐伯「（啞然とする）」

楓、驚いている。

場内、騒然となる。

国太郎「楓さん、いいのかい、このままで？」

新郎「ちよつと」

新郎の父「一体これは何の真似だ」

国太郎「すまねえが、あんたらは黙っててくれ」

新郎「……」

国太郎「楓さん、あんた、一生後悔するよ」

楓「……」

国太郎「あんたもだ、親父さん。後になって、ああすれば良かった、こうすれば良かったと後悔しても、後の祭りだ。やり直すんなら、今しかない。さア、思ってること口に出して言ってみな」

父「……楓」

場内がしんと静まり返る。

父「すまねがった」

と、頭を下げる。

楓「……」

新郎とその両親に向き直って、

父「楓の父でございます。ふつつかな娘ではあります、どうぞ末永く、よろしくお

願いたします」

と、頭を下げる。

新郎とその両親、戸惑いながらも頭を下
げ返す。

父はそのまま出口へ向かう。

母も一礼して、後を追う。

楓「待って！」

と二人を呼び止める。

泣きながら、

楓「今日は来てくれて、ありがとう」

と、花束を差し出し、

楓「これ、もらってける」

両親、花束を受け取り、泣き崩れる。

会場中がもらい泣きしている。

国太郎も目を潤ませている。

○ 繁華街（夜）

国太郎、必死で聡子を探し回っているが、
見つからない。

○ ゲームセンター（夜）

たむろする若者たち。

聡子を探している国太郎。

○ 交番（夜）

聡子が見つからず、国太郎、肩を落とし
て出てくる。

○ 空港近くのホテル・表（朝）

ホテルの上空を飛行機が飛んでゆく。
快晴である。

○ 同・一室

聡子、しょんぼり座っている。

おじ夫婦、聡子をちらちら気にしながら、
荷造りをしている。

おじ、無理に笑顔を作って、

おじ「しかし東京は暑いな。もうこりごりだ。
北海道はいいぞ。エアコンいらなから
な。扇風機で十分。なあ」

おば「え？ ええ」

おじ「おい、あれ、どうなってたかな、聡子
が通う学校」

おば「ああ、学校。うちから少し遠いけど、
みんな親切でいい子ですから、友達もす
ぐにできますよ。あ、それから、うちの
牧場にはね——」

聡子、立ち上がり、

聡子「ちよつと、その辺ぶらぶらしてくる」
と、部屋を出て行く。

心配そうなおじ夫婦。

おば「大丈夫かしら」

おじ「（唸る）」

○ ホテルの屋上

飛行機が飛び立ってゆく。

聡子、ぼんやり空を見上げている。

聡子「……」

○ 国太郎の事務所

国太郎、机に頬杖ついて眠っている。

とバランスを崩して、おでこを机に打ちつける。

国太郎「あイタリア——あイタリア」

電話が鳴る。

国太郎、受話器に飛びつく。

国太郎「もしもし？　もしもし？　……ああ、よかった……心配させやがって。いまだここにいるんだ？」

○ ホテル・ロビー

公衆電話から、かけている聡子。

聡子「……仕事を依頼したいんです」

○ 国太郎、受話器を握りしめ、じっと聞く
国太郎「……」

○ 羽田空港・滑走路

けたたましいエンジン音。
飛行機が離陸する。

○ 同・ターミナル・出発ロビー

手荷物検査所のあたり。

おじ夫婦と聡子、列に並んでいる。

聡子、きよろきよろと落ち着かない。

おじ「どうした？」

聡子「ううん」

おば「ほら、行くよ」

聡子「う、うん」

と、そのとき――

国太郎の声「聡子！」

国太郎が駆けてくる。

聡子「（顔が華やぐ）」

おじ夫婦、顔を見合わせる。

国太郎、息を整えてから、おじ夫婦に

深々と頭を下げる。

国太郎「私、関国太郎といいます」

おじ「はあ」

国太郎「このたび、娘の聡子がお二方のご厄

介になると聞いて、居ても立ってもいら

れず、無理を承知で参りました」

お婆「娘って、じゃあ、あなたが聡子の」

おじ「どんな、ご用件でしょうか？」

国太郎「この子を引き取らせてください」

おじ「えっ」

お婆「何を急に」

国太郎「身勝手なお願いだとは重々承知しております。ですが、私は聡子の父親でありながら、今まで何一つ、父親らしいことをしてやれませんでした。その埋め合わせがしたいんです」

お婆「でも今さら、そんなこと言われても」
国太郎「お願いします」

と、深々頭を下げる。

お婆、小声で、

お婆「どうします？」

困ったように、唸ってから、

おじ「聡子、お前の気持ちはどうなんだ？」

と、聡子を窺う。

聡子「お父さんと、一緒に暮らしたいです」

おじ「そうか……」

聡子「ごめんなさい」

と、頭を下げる。

おじとおば、困ってしまふ。

おば「どうします？」

おじ「仕方ないだろ」

おば「でも」

おじ「国太郎さんと仰いましたね。あなた、

責任持って、この子を幸せにすると誓え

ますか？」

国太郎「はい」

と、力強く答える。

おじ、大きなため息をついて、

おじ「（おばに）帰ろうか」

○ 雑居ビル・屋上（夜）

とっぷりと日が暮れた夏の夜。

夜空はネオンの灯りで白く濁っている。

アフリカの打楽器・ジャンベの音が響い

ている。

日本語教室に通う、様々な人種の外国人
らが、どんちゃん騒ぎをしている。

彼らから少し離れたところで、星空を眺
めている国太郎と聡子。

国太郎「これからどうするつもりだ」

聡子「施設にまたお世話になろうかと」

国太郎「そうか……」

聡子「あの」

国太郎「ん？」

聡子「報酬のことだけど」

国太郎「報酬？」

聡子「父親を演じてくれた分の」

国太郎「ああ、アレか」

聡子「少し待ってもらえませんか。時間はか
かるかもしれないけれど、必ずお支払い
しますから」

国太郎「いらないよ」

聡子「でも」

国太郎「そんなことより――」

聡子「？」

国太郎「いつそのこと、ここで暮らしたらどうだ？」

聡子「え？」

国太郎「嫌か？ 狭いし、汚いし」

聡子「いえ、そんな。でも」

国太郎「オレが君の親父なのかどうか、正直言って分からない」

聡子「……」

国太郎「ただ、君のおふくろさんがそうだつて言うからには、それなりの、まあ確信があつてのことだとは思ひし、それにこういう商売してると、家族ってなんだろうってよく考えるんだ」

聡子「それで？」

国太郎「家族って、要は血の繋がりがじゃなくて、心の繋がりがんじゃないかねかな」

聡子「心の繋がりが……」

国太郎「それで今、オレの心は——、せん越ながら君の父親として生きていくのも、悪くねえなって、そう思ってたんだ」

聡子「ほんとに？」

国太郎「ああ」

聡子、嬉しそうに笑顔を見せる。

外国人たち「クニさん！」

国太郎「おう、今行く」

聡子「ねえ、お父さんって呼んでもいい？」

国太郎「（照れて）お父さんか。悪くねえ

な」

聡子「じゃあ、パパは？」

国太郎「それだけは勘弁してくれ」

聡子、笑う。

国太郎、外国人らの賑やかな輪に加わる。

○ 国太郎の田舎

黄金色の水田。

バスがやってきて、停留所で停まる。

国太郎と聡子、降りてくる。

聡子、初めて見る田舎の景色に目を輝かせている。

一方の国太郎は表情は冴えない。

聡子「どっち？」

国太郎「えーと、どっちだったかな」

と、忘れたふり。

聡子「どっち！」

国太郎、観念して、指をさす。

○ 国太郎の実家・近くの道

聡子が先行し、少し遅れて国太郎が続く。

国太郎の足取りは重く、途中何度か回れ右して、引き返しそうになる。

そのたびに聡子が国太郎の手を引き、連れてゆく。

○ 同・表

聡子と国太郎、到着する。

表札には「関」とある。

聡子「ここかあ」

緊張する国太郎。

聡子「ほら」

と、国太郎の背中を押す。

○ 同・玄関

二人、たたきに入ってくる。
家の中は静まり返っている。

聡子「ほら」

と、国太郎を促がす。

国太郎「え？」

聡子「ただいまは？」

ため息をつき、

国太郎「（小声で）ただいま」

反応はない。

国太郎「留守だ。帰ろう」

聡子「だめ。もう一度、大きな声で」

国太郎「留守だって。わんこ蕎麦でも食って

帰ろう」

聡子「せっかく来たんじゃない」

国太郎と聡子が言い合っているところに、

奥から足音が近づいてくる。

老いた父が顔を見せる。

父「どちらさま？」

聡子「あ、あの――」

父「はい」

聡子「ほら」

と、国太郎を促がす。

国太郎「……ただいま」

父「？ ……国太郎か？」

国太郎「ああ」

父「本当に、国太郎か？」

国太郎「なんだよ、息子の顔、忘れちゃまったのか」

突然、父がたたきに降りてくる。

国太郎「な、なんだよ」

国太郎の手を取り、

父「よう帰った。ほんによう帰った」

と、涙を流す。

国太郎「なんだよ、泣くことねえじゃねえか」

国太郎の目にも涙が滲んでいる。

その横で、聡子もまた涙を流している。

○ 国太郎の実家・表

青空に、うろこ雲が浮かぶ。

家の向こうに連なる北上の山々。

鳶がピーヒョロロと飛んでいる。

すっかり秋である。

終